

科目ナンバリング		U-LAS02 10017 LJ36											
授業科目名 <英訳>		ドイツ文学 German literature					担当者所属 職名・氏名		文学研究科 教授 川島 隆				
群	人文・社会科学科目群				分野(分類)		芸術・文学・言語(基礎)			使用言語	日本語		
旧群	A群	単位数	2単位		週コマ数	1コマ		授業形態	講義（対面授業科目）				
開講年度・ 開講期	2024・前期		曜時限	月5			配当学年	全回生		対象学生	全学向		
[授業の概要・目的]													
前近代の文学に動物が登場するとき、それは基本的に①人間のメタファーとして何らかの寓意を表現するか、②象徴的な意味合いを帯びたモチーフとして働くかのいずれかであり、現実の動物そのものに関心が向くことは稀だった。しかし近代に入り、特に19世紀以降は、リアルな動物が描かれることが増えていく。この動きは、自然科学が発達するとともに、家畜としての動物や狩猟の対象になる動物の苦痛が問題化され、いわゆる「動物の権利」が唱えられ、動物愛護運動や菜食主義運動が盛んになっていく過程と連動していた。そこでは、「他者」としての動物の視点から人間の存在を相対化し、批判的に捉える人間中心主義批判の文学が数多く生み出された。この授業では、以上のような流れの中で具体的にどのような動物がドイツ文学に描かれてきたかを見ていく。													
[到達目標]													
1. ドイツ文学史について基本的な知識を得る 2. ドイツ文学に描かれる「動物」の特徴と、その文化的文脈を把握できるようになる													
[授業計画と内容]													
第1回	イントロダクション①――聖書や古代寓話の中の動物												
第2回	物語詩『レインケ狐』――中世と近代の境界線												
第3回	ゲーテ『ライネケ狐』――寓話の近代化												
第4回	グリム童話に描かれた動物たち――民俗学的イメージと個人の創作												
第5回	ホフマン『とある教養ある若者の消息』――人間と猿の境界線①												
第6回	シュペーリ『ハイジ』――家畜とペットの境界線												
第7回	エッセンバッハ『クランパンブリ』――リアリズム文学に描かれた「犬」												
第8回	リルケ『マルテの手記』――モダニズム文学に描かれた「犬」												
第9回	ボンゼルス『みつばちマーヤの冒険』――寓話と自然科学												
第10回	カフカ『田舎医者』――超現実的な「馬」												
第11回	カフカ『あるアカデミーへの報告』――人間と猿の境界線②												
第12回	リルケ『ドゥイノ悲歌』――「他者」としての動物①												
第13回	ザルテン『バンビ』――「他者」としての動物②												
第14回	ケストナー『動物会議』――社会批判と動物												
フィードバック													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
授業中の小課題にもとづく平常点（50%）および期末レポート（50%）で評価する。													
-----ドイツ文学(2)へ続く↓↓↓-----													

ドイツ文学(2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

授業で扱う／扱った作品を可能なかぎり実際に手に取って読んでみてほしい。

[その他（オフィスアワー等）]

kawashima.takashi.7v@kyoto-u.ac.jp